日光社参史料からみた江戸時代の民家の主屋規模・平面と
階層構成・家族人数の関係

THE RELATION BETWEEN THE SCALE OF THE FARM HOUSES (THE PLANNING FORM) AND HIERARCHY (THE FAMILY INSTITUTION) IN THE EDO PERIOD FROM THE HISTORICAL MATERIALS OF NIKKOU SHASAN

津田 良樹*
Yoshiki TSUDA

The object of this paper is to consider the relation between the scale of the farm houses or the planning form and hierarchy or the family institution from the record with Ezucho.

On the Kami-Kanai village in the Meiwa-ki (1764-1772) and Kami-Yokota or Yaita village in the Tenpo-ki (1830-1844), the scale of these farm houses was tended to enlarge with the increase of the Mochidaka.

By the relation between hierarchy and the planning form, during from the Kyoho-ki (1716-1736) to the Tenpo-ki, the type of Hiromagata was distributed from low level to high level. The type of Yomadori was found in the high level of the Kami-Yokota and Yaita village in the Tenpo-ki. There is not any relations between the members of the family and the scale of the farm houses.

Keywords : farm houses, scale, planning form, hierarchy, family institution, historical material, Nikkou shasan

はじめに

徳川将軍が日光に参詣する日光社参は、将軍が軍団編成を取る大勢の供侍をしたがえ、日光御成街道・日光街道を通り日光に至っている。その間、将軍の宿泊地は岩槻・古河・宇都宮であり、将軍に供奉する供侍たちは将軍の宿泊地周辺の村々に下宿¹⁾している。そのため村々では村内の住居の平面を調べた住居絵図帳を作成し、幕府に提出している。それら住居絵図帳のなかで農村に係る帳簿を、現在までに19冊見いだしている。19冊の住居絵図帳をもとに、主屋規模と平面形式についての検討は既に前稿で報告した²⁾。本稿では、前稿に引き続き住居絵図帳³⁾を中心に、関連文書を併せ、階層構成および家族人数と主屋の関係などについて検討する。

住居絵図帳には居住者名に村方三役の役名および百姓・水呑の別などを肩書することはあるが、持高や家族構成まで記されることはない。ここでは、関連文書から住居絵図帳の作成当時の階層を識別する指標として、各戸の持高が判明する場合を取り上げ、持高による階層構成と主屋の関係について検討する⁴⁾。また、宗門帳などから居住者の家族構成が判明する場合を取り上げ、家族人数と主屋との関係についても検討する。

1. 階層構成と主屋

1-1 享保期岩原村の階層構成と主屋

享保12年の『田畑御年貢惣百姓前勘定帳』⁵⁾(以下、『勘定帳』と略記する)より、岩原村の各戸の持高が判明する。この中には寺および東新里村と肩書きされる1軒が含まれており、これらを除外すると27軒である。享保12年の岩原村住居絵図帳と『勘定帳』とを対照すると23名の名前が一致する。また、享保3年の『宗門御改帳』⁶⁾を併せ検討すると『勘定帳』に分けて書き上げられている浅右衛門、伊右衛門の2名は太郎右衛門家の家族で、住居絵図帳では太郎右衛門1軒に当たり⁷⁾、また、『勘定帳』の作左衛門は住居絵図帳の権兵衛に当たる⁸⁾ことが判明する。これらの検討をもとに、岩原村における主屋規模と持高との関係を図-1に示す。

階層構成は、無高から、最大30石余までである。30石余は庄屋で特に多い。この庄屋を別にすると、無高から15石ほどの間に分布している。内容は、無高層が9軒、4石台までが2軒、5~9石台の持高層が最も多く16軒あり、次いで10~14石台の層が6軒と続く。

主屋規模と持高との関係は、持高と坪数の間には一定の対応関係は認められない。しかし、分地百姓でかつ無

* 神奈川大学 助手

Assistant of Kanagawa University

図一 享保期岩原村主屋規模（坪数）と持高
庄：庄屋，組：組頭，百：百姓代，分：分地百姓（結んだ線は，本家・分地関係を示す）。

高の8軒の主屋は16坪から29坪あり，いずれも持高の多い百姓からの分地で，実質的にはそれ相応の持高があったのではないかと推測される。これら8軒を除外してみれば，持高と坪数との間にある程度相関があるようにみえる。しかし，無高で29坪あるいは25坪ほどの主屋もあり，一方，11石余の持高で17.5坪ほどの主屋もある。

分棟型と階層との関係は，持高が多い層に分棟型が多い。例外ではあるが，無高あるいは持高5石ほどの分地百姓で分棟型の3軒は，その本家もまた分棟型である（図一2，図一3）。

平面形式と階層の関係は，居室1室だけの単室住まいの1軒は無高であり，土間と1部屋からなる一間取の3軒はそれぞれ無高・3.3石持・5.8石持で，単室住まいおよび一間取は持高の低い層に属している。29軒を占める広間型（広間型を基本に裏部屋などを拡張したものを含む）⁹⁾は，無高から30.8石（庄屋）までに分布し，持高との関係は顕著ではない。すなわち，享保期の岩原

図二 享保期岩原村分棟型の主屋規模（坪数）と持高
庄：庄屋，組：組頭，百：百姓代，分：分地百姓（結んだ線は，本家・分地関係を示す）。

図三 享保期岩原村非分棟型の主屋規模（坪数）と持高
庄：庄屋，組：組頭，百：百姓代，分：分地百姓

村では単室住まいおよび一間取は持高の低い層に属すが，広間型は階層差に関係なく分布している。

1-2 明和期上金井村の階層構成と主屋

明和8年の上金井村『田畑御年貢算用帳』¹⁰⁾より，上金井村のそれぞれの百姓の持高が判明する。さらに，『五人組御改帳』¹¹⁾より「壹軒百姓」・「分地百姓」の別がわかる。これらをもとに主屋坪数と持高等との関係を図一4に示す。庄屋は持高・坪数ともに特に大きく，持高が30石余，主屋坪数が70.5坪ある。

持高は，4石台までが1軒，5～9石台が13軒，10～14石台が15軒，15～19石台が2軒，30石余が1軒である。5～14石台の間に32軒中28軒が分布している。当村においては分地百姓でも5～10石ほどの持高が多い。

主屋規模は，9坪台までが2軒，10～19坪台が7軒，20～29坪台が14軒，30～39坪台が5軒，40～49坪台が3軒，70.5坪が1軒である。坪数において本百姓と分地百姓の間に大きな格差は認められない。

持高と坪数との関係は，例外もあるが，持高が5石ほど増加すれば坪数が10坪ほど増加するという比例関係

図四 明和期上金井村主屋規模（坪数）と持高
庄：庄屋，惣：惣代，分：分地百姓，▲：「草カキ」

が認められる。

小規模主屋には壁を「草カキ」¹²⁾にする場合が多いが、「草カキ」の主屋に住む者でも14石あるいは11石ほどの持高の場合もある。組頭の内の1人は、14石ほどの持高があるにもかかわらず、「草カキ」の12.5坪の小規模な主屋に住んでおり、他の村などの例に較べて異例である¹³⁾。

平面形式と階層との関係についてみれば、一間取および二間取の11軒には4.4石・5.1石の当村では最も少ない持高層の主屋が含まれるだけでなく、11.4石・13.8石など中位の持高層の主屋も含まれている。また、広間型に較べ持高の割に坪数が少ない傾向がある(図-5)。

20軒を占める広間型には、持高6.7石から30.1石までの広い階層の主屋が含まれている。また、全体的に持高の割に坪数が多い傾向がある(図-6)。なお、喰違四間取の1軒は45坪で12石余の持高である。

以上のように、一般に持高と平面形式との間に一定の対応関係は認められない。

1-3 明和期高谷林新田村の階層構成と主屋

明和6年の『五人組御改帳』¹⁴⁾によって、高谷林新田

図-5 明和期上金井村一間・二間取の主屋規模(坪数)と持高

図-6 明和期上金井村広間型の主屋規模(坪数)と持高

図-7 明和期高谷林新田村の主屋規模(坪数)と持高
庄：庄屋，組：組頭，惣：惣代，水：水呑

村の百姓および水呑の持高がわかる。住居絵図帳から算定した主屋坪数と持高との関係を図-7に示す。

持高は、4~7石台に12軒中7軒が集中している。12.5石持は庄屋で、当村においてはとびぬけて持高が多いが、近村の岩原村・上金井村等に較べるとはるかに少ない。寛文期に新田開発が始まったが、その後も水に恵まれず、開発が進まなかったためであろう¹⁵⁾。当村内における階層差は比較的小さい。

坪数は、最大38.5坪から最小21.25坪の間の狭い範囲に分布している。

持高と坪数との関係は、持高の最も多い12.5石の庄屋の主屋が規模においては2番目の広さであり、一方、無高の水呑の主屋が23.25坪ほどあって、最小規模ではない点が注目される。しかし、格差は小さいが、持高と坪数とがある程度相関している。すなわち、あえていえば5~6石層は25~40坪ほど、2石以下の層は20~27坪ほどの範囲にある。

平面形式は、庄屋の主屋が土間沿いの広間(高谷林新田村住居絵図帳では「台所」)の後側に奥行1間ほどの寝間を配した四間取となるほか、残る11軒はいずれも広間型である。そのため、庄屋の主屋を別にすれば、持高には関係なく広間型で、階層差による平面形式の変化はみられない。

1-4 文政期田中村の階層構成と主屋

文政期田中村の百姓の持高は、文政13年の『五人組御改帳』¹⁶⁾よりわかる。しかし、住居絵図帳は文政6年ごろと考えられ、6~7年の年代差があり、24軒中9軒の名前が一致しない。しかし、文政6年の『宗門御改帳』¹⁷⁾を併せて検討することによって、その内の7軒は同一家系であることを考定することができる。それでも不明な2軒は検討から除外している¹⁸⁾。坪数と持高との関係を図-8に示す。

持高は、4石台以下が2軒、5~9石台が7軒、10~14石台が9軒、15~19石台が4軒である。

図—8 文政期田中村の主屋規模(坪数)と持高
組：組頭，惣：惣代，水：水呑

坪数は、特に大きい3軒を除けば18～30坪の範囲にある。

坪数と持高との関係は、持高が多くなると坪数が大きくなる傾向は窺えるが、両者の間に強い相関は認められない。

平面形式と階層との関係についてみると、広間型は持高3石ほどの水呑を含め持高3石台から16石台までの幅広い範囲に分布している(図—9)。

土間沿いの広間後側に寝間を設ける四間取は、4石台以下にはないが、6石持でもこの型の主屋もあり、一概に持高の多い層にこの型が多いともいえない。むしろ、大規模な主屋にこの型が多いといえよう(図—10)。なお、一間取と二間取のそれぞれ1軒は持高不明のため分布図では省いている。これら2軒は文政13年には「潰百姓」となっており、文政6年当時すでに経済的に行きづまっていたと推測される。

1-5 天保期上横田・屋板村の階層構成と主屋

天保13年の住居絵図帳より4年後にあたる弘化3年の『村高銘々持高潰高書上帳』¹⁹⁾より、上横田・屋板村の各戸の持高がわかる。しかし、4年の年代差があるためか、寺および隠居を除く45軒のうち3軒は該当する

図—9 文政期田中村の広間型主屋規模(坪数)と持高

図—10 文政期田中村の広間後側に寝間を配する四間取の主屋規模(坪数)と持高

名前が見当たらず、ここでは検討から省いている。住居絵図帳から算定した坪数と持高の関係を図—11に示す。上横田・屋板村は持高・坪数ともに前記の4村に較べるとかに大きい家が多い。

持高は4.5石から69石ほどの間に分布しており、10～20石に18軒が集中している。

坪数は、最小6坪から最大106.25坪の間に分布し、30～35坪に12軒が集中している。

持高と坪数との関係は、持高が10石に満たないにもかかわらず、32坪・34坪・36坪ほどの主屋を所持する場合もあれば、逆に、14石・20石ほどの持高があるにもかかわらず、10坪に満たない主屋しかない場合もある。

図—11 天保期上横田・屋板村の主屋規模(坪数)と持高
庄：庄屋，組：組頭，惣：惣代

る。しかし、それら例外を除けば、持高が多くなるにつれて主屋坪数も大きくなる傾向が上金井村などに較べて顕著である。村役人層のうち庄屋など3軒は持高・坪数ともに際だって大きい。残る組頭の1軒も26石余の持高で66坪の主屋である。

平面形式と階層との関係についてみると、一間取の2軒は8石余および14石余である。

広間型（広間型を基本に裏部屋などを拡張したものを含む）は42軒のうち30軒を占めており、この30軒は、持高の最も少ない4.5石から40石の間に幅広くみられる（図-12）。

四間取の9軒はすべて20石以上である。特に40石以上の4軒はいずれも四間取である（図-13）。

すなわち、当村の百姓の主屋は広間型が一般的で、持高20石以上の層では四間取が多くなり、40石以上はすべて四間取になる。一方、一間取も少数ではあるが存在している。

1-6 小 結

以上、持高の明らかになる岩原村、上金井村、高谷林新田村、田中村、上横田・屋板村について持高と分棟型・主屋規模・平面形式などの関係を検討した。

分棟型は享保期の岩原村で4割ほどみられ、以降の各村では全くみられず、階層構成との関係では、持高が多い層に多いことが判明した。例外ではあるが、無高あるいは5石ほどの分地百姓で分棟型の場合があり、この場合はその本家が分棟型であることも明らかとなった。

階層構成と主屋規模についてみると、持高が増加する

図-12 天保期上横田・屋板村の広間型の主屋規模と持高

図-13 天保期上横田・屋板村の四間取の主屋規模（坪数）と持高

につれて主屋規模も大きくなる傾向が明らかなのは上金井村、上横田・屋板村である。これらの村では、平均的に持高の多い上横田・屋板村の方が大きくなる割合が強い。高谷林新田村は寛文期に開かれており、開かれてからの年月が浅い関係と比較的規模が集中し、全体的に規模の割に持高が少なく、小さい住居がないのが特徴である。その他の村については目立った特徴はみられない。

階層構成と平面形式についてみると、一間取・二間取は享保期～天保期を通じて少数ながら存在し、それらは持高の少ない層の住居である場合が多い。また、広間型は分棟型の床上部分が広間型の場合も含め、享保期～天保期の各期を通じて持高の少ない層から多い層まで広く分布している。喰違四間取・整形四間取などの四間取は天保期の上横田・屋板村の持高の多い層でみられ、そのほかでは明和期の上金井村の比較的高持高の多い1軒である。土間沿いの広間後側に寝間を設ける四間取は、文政期の田中村の中～上の階層で7軒みられる。しかし、明和期の高谷林新田村では最も持高の多い庄屋家1軒のみで、享保期の岩原村では中ほどの階層に1軒、また、天保期の上横田・屋板村では2軒が中ほどの階層にみられるのみである。

2. 家族人数と主屋

2-1 享保期岩原村の家族人数と主屋

享保3年の『宗門御改帳』より、享保期の岩原村の各戸の家族構成がわかる。しかし、住居絵図帳は享保12

年であり10年の年代差があるためか、住居絵図帳の34軒中4軒は、家族構成が明らかでない。ここでは家族構成が判明した30軒について検討する。なお、『宗門御改帳』と住居絵図帳との間に10年の開きがあるため、家族構成に変化があるはずだが、住居は10年ほどの間に急激に変化するとは考えられず、趨勢把握には支障なく利用できると考える。

家族人数は、庄屋家が16人、組頭の内の1人の家が11人と多いが、両家にはそれぞれ9人および4人の下人が含まれているためである。そのほかの家は2～8人である。そのうち、6人家族が最も多く10軒あり、7人家族および4人家族の5軒が次いで多い。平均家族人数は6人である。

夫婦とその両親および子供夫婦からなる直系家族と叔父夫婦や戸主の兄弟夫婦などの傍系および下人・前地などからなる複合家族に分類すると、直系家族が21軒、複合家族が9軒である。複合家族9軒のうち下人を置く家が4軒ある。

家族人数と坪数の関係を図一14に示す。同じ6人家族でも12.5坪から29坪と広い幅があるように例外も多いが、家族人数と主屋坪数とはある程度相関しているようである。

家族1人当りの主屋坪数は、最小2.1坪、最大10.5坪である。10.5坪はとびぬけて大きく、家族人数が2人と少ないためである。とびぬけて大きい10.5坪を別にすると1人当りの坪数は2.1～6.5坪に分布しており、3坪台に14軒が集中している。1人当り主屋坪数の平均は3.6坪である。

図一14 享保期岩原村の主屋規模(坪数)と家族人数

岩原村家族人数

家族人数	2	3	4	5	6	7	8	11	16 (人)
軒数	2	1	5	3	10	5	2	1	1 (軒)

岩原村1人当り主屋坪数

坪数(坪台)	2	3	4	5	6	10 (坪台)
軒数	6	14	4	4	1	1 (軒)

2-2 明和期高谷林新田村の家族人数と主屋

高谷林新田村の明和6年の『五人組御改帳』と明和7年の住居絵図帳とを照合して主屋坪数と家族人数の関係を図一15に示す。

家族人数は、最小3人、最大8人である。6人家族が最も多く、半数の6軒を占めており、平均家族人数も6人である。

12家族のうち、直系家族が10軒、複合家族が2軒である。なお、複合家族に血縁関係のない下人等を含むものはない。6人家族の6軒はそれぞれ24坪・31.5坪・34坪・35坪・37坪・38.5坪の主屋に住んでいる。3人家族は当村では最小の21坪の主屋に住んでいるが、最も多人数の8人家族の2軒は小から中規模の23坪・27坪の主屋に住んでいる。以上のように、家族人数と主屋規模との間に相関はみられない。

1人当りの坪数は、最小が2.9坪、最大が7.45坪である。5～6.5坪ほどが多く、半数がこの範囲に入り、平均1人当り坪数は5.2坪である。

2-3 文政期田中村の家族人数と主屋

文政13年の『五人組御改帳』より、田中村の各戸の家族構成がわかる。文政6年ごろの住居絵図帳とは6～7年の年代差があるためか、24軒のうち2軒は名前が一致しない。家族構成が判明する22軒について検討する。

図一15 明和期高谷林新田村の主屋規模(坪数)と家族人数

家族人数は、最小2人、最大10人である。4人・5人・6人の家族がそれぞれ4軒、7人・8人の家族がそれぞれ3軒ずつで多い。そのほか9人が2軒あり、10人および2人がそれぞれ1軒である。平均家族人数は6人ほどである。22軒のうち、直系家族が13軒で、複合家族が9軒あり、他の村に比べ複合家族の占める割合が大きい。また、この複合家族9軒には血縁関係がない下人などを含む例はない。

家族人数と坪数との関係を図一16に示す。なお、ここでは家族人数と住居規模との関係をみるため、隠居屋はそれぞれの主屋に加算している。家族人数が最小の2人家族の住居が30坪あり、また、同じ5人家族であっても小は8坪、大は41坪の住居であるなど分布の範囲は広いが、坪数と家族人数とはある程度相関している。

1人当りの坪数は、最小2.9坪、最大15坪である。この15坪は家族人数が2人なので除外すれば2.9～7.6坪である。なかでも3・4・5坪台が多く17軒がこの間に集中する。平均は5.3坪である。

田中村家族人数

家族人数 2 3 4 5 6 7 8 9 10 (人)

軒 数 1 0 4 4 4 3 3 2 1 (軒)

田中村1人当り坪数

坪数(坪台) 2 3 4 5 6 7 15 (坪台)

軒 数 1 5 5 7 2 1 1 (軒)

2-4 上横田・屋板村の家族人数と主屋

住居絵図帳と同じ天保13年の『宗門御改帳』がある。しかし、同じ年にもかかわらず2つの史料間で名前が必ずしも合致しない。ここでは、対応関係が明らかな住居絵図帳の45軒中43軒について検討する。

図一16 文政期田中村の主屋規模(坪数)と家族人数

家族人数は、最小2人、最大19人である。とびぬけて多い19人には、前地の一家6人が含まれている。19人を別にすれば、2～12人であり、中でも5人が6軒、6人が8軒、7人が5軒、8人が6軒と多く、5～8人が25軒を占める。平均は6.7人である。このうち、直系家族が30軒、複合家族が13軒で、13軒のうち血縁関係のない前地などを含むのは19人の1軒だけである。

家族人数と坪数との関係を図一17に示す。なお、ここでは家族人数と住居規模との関係をみるため、隠居屋2軒はそれぞれの主屋の坪数に加えている。7人家族では7.5坪から40坪を越す場合まであり、家族人数と坪数との間には強い相関はみられない。

1人当りの坪数は、1人当り1.25坪から19.1坪まで極めて幅が広い。1人当り2～5坪台が多く、この間に27軒が分布している。平均は5.9坪である。また、8坪をこす場合が10軒あり、このうち5軒は家族人数が3人以下のため1人当りの坪数が大きくなっている。しかし、7人以上であるにもかかわらず1人当り坪数が15.2坪・9.9坪・8.25坪ある主屋もある。一方、1人当り3坪未満も7軒ある。すなわち、当村においては主屋内で占める1人当りの坪数は、極めて格差が大きい。

上横田・屋板村家族人数

家族人数 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 19 (人)

軒 数 2 3 4 6 8 5 6 1 2 3 2 1 (軒)

上横田・屋板村1人当り主屋坪数

坪数(坪台) 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 15 19 (坪台)

軒 数 1 6 8 6 7 3 2 2 3 1 1 1 1 1 (軒)

2-5 小 結

家族構成が判明する岩原村、高谷林新田村、田中村、

図一17 天保期上横田・屋板村の主屋規模(坪数)と家族人数

上横田・屋板村について家族人数と主屋規模との関係を検討した。各村・各期を通して概観すれば以下のようなものである。家族人数は、全般的に4~8人ほどが多く、多人数の家族で12人である。一般的百姓家の人数は、各村・各期を通じて5~7人ほどとみてよい。血縁親戚でない下人や前地を含むもので15人を越すものが享保期岩原村・天保期上横田村でそれぞれ1軒みられる。

主屋内で占める1人当りの坪数の平均は、検討した5村ともに3~5坪台が多く、一般的百姓では5村の中で最も古い時期に当たる享保期岩原村では3.5坪ほど、それ以降の4村では5~6坪である。その中で、天保期上横田・屋板村は平均的には各村と大きな差はみられないが、各戸間の格差が大きくなっている。

家族人数と主屋坪数との関係は、享保期の岩原村および文政期の田中村においてはある程度相関しているが、それ以外の2村では両者の間に強い相関はみられない。

家族人数と主屋坪数との間に相関関係がほとんどない原因として以下の点が考えられる。当然のことながら家族の存続期間と主屋の存続期間は必ずしも対応せず、それが一因ではあろう。しかし、それ以上に、主屋内に住む個々人の住空間の確保よりも、村落共同体内部において村民間の相互扶助（たとえば結）の確立や家格などに重きが置かれ、それらが住居を決定する大きな要因になっているためではないかと考えられる。

ここに、従来、江戸時代中・後期においては家族人数と主屋規模との間には相関関係があまりないであろうと漠然的に考えられていた点を歴史上再確認することができた。

おわりに

以上、階層構成と主屋、家族人数と主屋について検討した。要約すれば以下の通りである。

階層構成（持高）と主屋規模との関係は、持高が増加するにつれて主屋規模も大きくなる傾向が明らかなのは明和期の上金井村、天保期の上横田・屋板村である。これらの村では、平均的に持高の多い上横田・屋板村の方が大きくなる割合が強い。

享保期の岩原村で4割ほどみられる分棟型は、持高の多い層に多い。

階層構成と平面形式についてみると、一間取・二間取は享保期~天保期を通じて少数ながら存在し、それらは持高の少ない層に属するが多い。広間型は、享保期~天保期の各期を通じて持高の少ない層から多い層まで広く分布している。四間取は天保期の上横田・屋板村の持高の多い層でみられる。

家族人数と主屋についてみると、1戸当りの家族人数は、5~7人ほどである。1人当りの坪数の平均は、享保期岩原村で3.5坪ほど、それ以降の4村で5~6坪であ

る。ただし、天保期の上横田・屋板村では各戸間の格差が大きい。

家族人数と主屋坪数との間には相関はほとんど認められない。その原因は、村落共同体内部において村民間の相互扶助の確立や家格などが住居を決定する大きな要因であったためではないかと考えられる。

註

- 1) 『日本国語大辞典』（小学館）によると「下宿」は、「したやど：江戸時代、大名などが宿駅の本陣にとまる際、家臣たちの宿泊する所」とある。
- 2) 拙稿『日光社参史料からみた江戸時代の主屋規模と平面形式』（日本建築学会計画系論文報告集 第413号、1990年7月）。
- 3) 前稿に引き続き、日光社参史料のなかで、村内の住居の平面を調べて書き上げた絵図帳を住居絵図帳と称し、各村の住居絵図帳は村名を頭に付けて、たとえば「岩原村住居絵図帳」のように呼ぶ。なお、史料名・所蔵者名・所蔵者住所などは前稿に示した通りである。
- 4) 近世における農民層分解については、これまで農民諸個人の持高別農家階層が指標として使用されてきた。それは年貢収納が累進税率によらず、農民の持高に応じたものであったことによる。幕末期、土地所有と経営が分離し、地主・小作関係が展開すると、経営高を知りうる史料も作成されるが、こうした史料の残存をみない村方においては、他に基準にすべき史料を欠き、持高を指標に農民階層を考察せざるをえないのが、歴史学研究的現状でもある点に留意しておきたい。
- 5) 享保12年、『未、田畑御年貢惣百姓前勘定帳』高橋悦郎家文書。
- 6) 『享保三戊戌年、下野国河内郡宇都宮領戸祭篠岩原村宗門御改帳』高橋悦郎家文書。
- 7) 享保3年の宗門帳によれば太郎右衛門の息子として浅右衛門、伊右衛門が書き上げられている。
- 8) 享保3年の宗門帳によれば作左衛門の伯父として権兵衛が書き上げられている。
- 9) 14軒の分棟型は、床上部分の平面形式より分類すれば13軒が三室広間型およびその三室広間型の背後に裏部屋を拡張したものである。残る1軒は土間沿いの広間後側に寝間を設ける四間取である。分棟型・非分棟型にかかわらず床上部分の平面型についてみれば、広間型が29軒である。
- 10) 『明和八歳霜月、辛卯田畑御年貢算用帳、戸祭筋上金井村』柿沼涉家文書。
- 11) 『延享五年五月、辰年五人組御改帳』（柿沼涉家文書）、延享五年の年紀があるが、その後も天明・文化期まで加筆・訂正を加えている。
- 12) 「草かき」・「草垣」と記されることもあり、秋山地方などで見られた茅壁ではないかと考えられる。
- 13) 持高が多いにもかかわらず、小規模でかつ「草かき」の主屋は、あるいは明和7年当時すでに建築されて相当年月を経た主屋ではないかと考えられる。
- 14) 『明和六丑年、五人組御改帳』山川涉家文書。
- 15) 奥田謙一『寛文・延宝期の宇都宮西原新田の開発』栃木県史研究第5号、昭和48年3月所収。

- 16) 『文政十三庚寅年三月，下野国河内郡宇都宮領戸祭篠田中村五人組御改帳』池田憲雄家文書。
- 17) 『文政六年三月，戸祭篠田中村宗門御改帳』城野正一家文書。
- 18) 不明な2軒は『五人組御改帳』によると「是ハ潰百姓」と註記されており，いずれにせよこの2軒（廉蔵・平吉）

は文政13年には潰百姓となっている。

- 19) 『弘化三丙丑年，村方銘々持高潰高書上帳下書，上横田村』稲見忠之家文書。

(1990年6月10日原稿受理，1990年10月16日採用決定)